

経済学理論と実証モデルを高等教育改革と国際化へつなげる

一橋大学提供
作成日 2016年 2月24日
更新日 2016年11月21日



| | | |
|--|--------------------------------------|---|
| 研究者氏名 まつづか ゆかり 松塚 ゆかり | 所属機関 一橋大学・森有礼高等教育国際流動化センター | 関連キーワード(複数可) 高等教育国際化、人材の流動化(モビリティ)、チューニング、IR (Institutional Research; 大学機関調査研究) |
| 主な研究テーマ 経済学理論と定量的実証分析に基づき、人材の国際流動化時代における高等教育の課題を明らかにし、教育改革と国際化の方策を探るとともに、その経済的社会的インパクトを解明する。 | | 主な採択課題 ・基盤研究(C)平成19～20年度(配分総額:3,900千円) 課題名「大学改革のためのナレッジマネジメント: その理論と実践」 ・基盤研究(B)平成23～25年度(配分総額:15,860千円) 課題名「高等教育改革、人材流動、ブレインゲインの相互作用に関する実証研究」 |

① 科研費による研究成果

米国で発展したIRの理論と実践を調査し、大規模データと機関データの統合・蓄積・分析方法を精査して、日本におけるIRの実践モデルを設計・導入した。この経験をもとに、高等教育改革と国際化を促す要因を明らかにし、人材の国際流動がもたらす経済・社会効果を理論的、実証的に解明した。具体的には、

- 学習成果に重点を置いた「アウトカムベース」の修学経路(パスウェイ)と成績(GPA)の変動構造をIRにより解明
- 修学パスウェイを構成するコンピテンス定義を用いて、国際的カリキュラム調整に有効な「チューニング」を研究し日本に導入
- 自己選択仮説を応用し高度人材のモビリティパターンを解明
- 絶対優位性と比較優位性それぞれに基づく大学間競争の在り方を明らかにして、機能分化論に則した大学の競争力強化と共存の可能性を示唆
- チューニングによる大学間情報共有は教育・研究の学術的実質性を高めると同時に留学や研究交流を促進する一方で、社会人の学び直しをも促進するメカニズムを解明



② 当初予想していなかった意外な展開

本研究が明らかにした、大学による人材流動化のための具体的方策が注目され、日本経済新聞を始めとするメディアの取材対象となり、また多くの執筆・講演依頼が国内外から寄せられた。

基盤研究CによるIRの実績は、平成22年度の文部科学省大学教育推進プログラム「単位実質化マキシマムモデルの実践と普及一評価、教育、支援をつなぐカタリストとしてのIR」につながった。基盤研究Bによるチューニング研究は、平成24年～25年の一橋大学戦略推進経費事業を経て、平成26年度採択文部科学省特別経費「チューニングの研究実践・普及」の採択、及び日本で初めてチューニング等の国際流動化を研究する組織となる

森有礼高等教育国際流動化センターの設立につながった。

www.tuningjapan.org
<http://www.arinori.hit-u.ac.jp/>



③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

コンピテンス定義に基づくアウトカムベースの学習と評価、学生と高度人材の国際流動を促すチューニング、社会人の学び直しは、日本の高等教育と人材育成をめぐる重要課題であり、本研究により得られたモビリティ研究の枠組みと実践モデルは日本の大学教育の国際通用性を高めると同時に、国内外の高度人材の養成と獲得に貢献する。ここに示す研究成果は、『国際流動化時代の高等教育』松塚ゆかり編、ミネルヴァ書房(2016)にまとめ、出版した。